

優秀賞

辻愛美さん 文学部現代社会学科 3年

「そこに僕はいた」 辻仁成著 新潮社

人は大人になるために、何を失うのだろうか。

高度成長期を経て、日本は飛躍的に発展した。街中には高層ビルが建ち並び、ランドセルを背負った小学生がケータイを手にする姿も、そう珍しくはない。

本書は、著者の子ども時代を記したエッセイである。その時代背景は、私にとってぴんとこないものが多い。しかし、子どもたちのあり方は、今も昔も同じように思う。誰もが通り過ぎてきた少年期。本書はそれを思い出す機会を与え、失われた純真無垢な気持ちを甦らせる。

全十八編に渡り、小学生から高校生までの辻少年の「ある日」を描く。思い出の日々を盛り上げるユニークな登場人物。一際異彩を放っているのが、僕が小学五年生の時、鹿児島からやってきた転校生ゴワスだ。給食にドレッシングやジャムを持ち込み、牛乳はシェーカーを使ってコーヒー牛乳に変えてしまう。知ったかぶりを得意とするゴワスをからかう僕。ゴワスのその特技が災いし、僕はとんでもないトラブルに巻き込まれてしまう。一癖も二癖もある人々は、ともすれば嫌な思い出として僕の中に残るかもしれない。しかし、大人になった著者は、昔の出来事を宝物を愛でるかのごとく、大切に大切に紡ぐ。

小学三年生の辻少年は、近所でも評判のガキ大将だった。著者はその頃の事を「小さな子供達を集めては、陣頭指揮をとり」と語る。そして、僕には義足の友だち・あーちゃんがいた。周囲の大人は、あーちゃんと遊ぶことを良しとしなかった。しかしあーちゃんは、そういった周りの態度をはねのける程、負けん気が強かった。いや、障害を抱えているからこそ、意地を張っていたのかもしれない。

僕は、周囲とあーちゃんの間で揺れる。だが、そこはやはり子どもだ。一緒に遊んでいるうちに、そんな気持ちはどこかへ消えてしまう。ある日、ぬかるみに足を取られたあーちゃんに、僕は自然と手を差し出す。今までは、誰かが手を差し出すことを拒んでいたあーちゃんが、僕同様、するりと手を掴む。

二人の関係が変化し始めて、僕はあーちゃんに義足になった理由を訊ねた。「どうしてそんなことを聞いたのか僕にはあのときの自分の気持ちを思い出せない。差し出した手のような自然の質問だった」という。あーちゃんは、線路内にいた子猫を助けようとして、電車で轢かれたと告げる。僕は、そんなあーちゃんを好きになりはじめる。

子どもは無邪気だ。障害があるとかないとか、そんなことは飛び越えてその人本人を見る。もちろん、大人が皆そうでないとは言わない。しかし、私たちは知ってしまったからこそ、人を色眼鏡で見ってしまうし、同情せずにはいられない。このシーンは、私たちが忘れてしまった心をありありと描く。

昔はもう戻ってくることはないけれど、思い出すたびに胸が温かくなる。偏見やあきらめ、理想と現実の壁などにぶち当たったとき、ちょっと立ち止まり、振り返ってみよう。そこにはあの日の自分がいるかもしれない。